



郷土と造花を愛する 「平成の花咲かじいさん」

第3部



実は、もう一人大津町で造花をつくっている人がいます。
豊岡吉人さん（82歳）。祖父から続く、梅の造花の作成者です。今は一人で活動を続けていますが、60年余りも造花と共に生きたその深い思いはだれにも負けません。

もともと、父が作っていた造花を見て育った吉人さん。終戦後、昭和21年に故郷である大津に帰ったときに、昭和20年8月24日に地蔵祭が開催されたことを知ります。終戦記念日である8月15日からわずか数日しかたっていないにも関わらず、祭は開催された。そのことに感銘を受けた吉人さんは、翌年から梅の造花づくりを始めました。「技術は盗むもの」と、父の技術をじつと見ながら習得していった吉人さんは、昭和36年に造花が一時途絶えたとき、道草紙を自分で探しました。豊岡さんは、「東京で紙を見つけたことが再開のきっかけになった」と話しま



豊岡さんは、今は梅だけでなく桜にも挑戦しています

す。東京にある造花専門店で見つけたときの気持ちは、言葉に表せる喜びではなかったかもしれせん。
再開後も造花づくりを続け、この文化を遺していこうと努力を重ねます。造花に興味を持ってもらうために、ポトルシップのようにペットボトルに造花を入れてみるなど、今でも工夫を重ねています。最近では、ALT（外国語指導助手）のコーリン・サンダール先生にも帰国前に梅の造花をプレゼントして、大津の文化の素晴らしさを伝えました。
「自分の故郷を愛する気持ちは、故郷を離れてこそ分かるもの。その愛する故郷にある文化を大切にしたいという思いは自然なことですよ」と話す豊岡さん。戦争や仕事で故郷を離れていたことで古里に対する愛は大きくなりました。
「心を豊かにするために文化はありますから」豊岡さんは、梅の造花の未来に警鐘を鳴らし続けています。

今までの活動 無駄ではない思い

新開ツキ子さん（以下、新開） 今日
は、よろしくお願ひします。

豊岡吉人さん（以下、豊岡） こちらこそ、よろしくお願ひします。

豊岡 私は、今まで山鹿灯籠に負けな
いように奮闘してきました。熊本
の伝統民芸として、梅の造花と山鹿灯籠が
肩を並べるまでにしたかった。この文
化の素晴らしさを伝えるために頑張り
ました。

新開 今は、人の目に止まること
が少なくなってきたからです。

豊岡 この前、造花を寄贈した人に
久しぶりにあったら、「床の間に飾って
います」って言われて、「せっかくな
ら玄関に飾ってください」って言ったこと
があるんですよ。やっぱり多くの
人に見てもらいたいですから。

新開 もっと（造花を）手に入れ
ることができるようになればいいん
でしょうけど。私は、20歳のころ
にお嫁にきて造花を見て「すごいな」と思
ったのがきっかけです。それから35年
。皆さんに知ってもらいたい一心でや
ってきました。やっぱり造花に対する
思いは「つくった人にしか分らない
かな」と思っていたけれど、つくっ
ていない人でもその思いが伝わる
ように、頑張ってきたつもりです。

「長年活動を行ってきた、できな
かったことや心残りはありますか？」

豊岡 人々に梅の造花に対する関心
を持たせることができなかったこと
です。とても努力が要ります。並大
抵の努力じゃ足りません。

新開 私も町の人に心が無いこと
を心配しています。やっぱり町を代
表する文化だと思っていますからね。

豊岡 自分にとって「梅の造花」は、
愛する古里のたった一つの民芸品
ですからね。大切にしたいですよ。

新開 そうですね。私も何百個も造
花をつくってきましたので、人生や生
活の一部みたいなものになっています。

「今日は、豊岡さんと新開さんの
作品を持ってきてもらいました。ど
うですか？お互いの作品をご覧にな
って。」

豊岡 少し奇麗すぎるかな？花も散
りそうな花を入れるなど、変化をも
たせるともつと良くなるような気が
します。

新開 もう死ぬまで勉強ですね（笑）
頑張ります。

豊岡 この枝は、曲げて作ったんで
すか？

新開 いや、この梅は「雲龍梅」と
いってこういう（曲がりくねった）
枝なんです。

豊岡 この枝は見事です。

新開 豊岡さんの枝の継ぎ方も見事
だと思えます。つなぎ目が分かりませ
んね、これ。

第4部

志を同じにする者が 思い描く理想

肥後大津民芸造花保存会代表
新開ツキ子さん
豊岡吉人さん 特別対談

